

| 分野 | 科目名 | 単位(時間) | 講師所属 | |
|------|---|--|---|--|
| 専門分野 | 地域・在宅看護総論 | 2(45) | 専任教員 | |
| | 開講時期 | 講義回数 | | |
| | 2学年前期 | 22回 | | |
| 実務経験 | | <input checked="" type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無 | | |
| 目標 | 1.地域で生活する人々の暮らしを理解し、暮らしが健康に与える影響について考えることができる。 2.地域・在宅看護の対象と看護の基盤となる概念を理解する。 3.地域・在宅看護の環境と多職種連携を理解することができる。 | | | |
| 授業内容 | 回 | 項目 | 内 容 | |
| | 1 2 3 4 5 | 地域・在宅看護の 目的と特徴 | 1.地域・在宅看護を取り巻く日本の社会の状況 ・超高齢多死社会の進展 2.在宅看護の変遷 ・保健・医療・福祉の動向 3.地域・在宅看護が提供される多様な場 4.地域・在宅看護に求められること ・地域・在宅看護における看護師の倫理 | |
| | 6 7 8 9 | 地域・在宅看護の 対象者 | 1.対象者の特徴 ・それぞれの状態から考える 2.家族への支援 ・ライフサイクル・ライフイベント 3.支えあって暮らすこと ・学校・職場、仲間や友人、近隣との関係 | |
| | 10 11 12 13 14 15 16 17 | 地域・在宅看護にかかわ る法令・制度 | 1.医療保険制度 2.介護保険制度 ・利用の手続き・給付対象サービス 3.訪問看護制度 ・訪問看護の対象者・回数 ・ステーションに関する規定(介護保険・医療保険) 4.各保健・障がい者等に関する法と施策 5.権利保障に関する法と施策 ・個人情報保護法・リスクマネジメント・成年後見・虐待防止 | |
| | 18 19 20 | 保健・医療・福祉におけ る多職種との協働・連携 | 1.地域・在宅看護を支える専門職の役割と責務 ・保健・医療・福祉チームにおける機能・役割・協働の必要性 2.社会資源の活用 | |
| | 21 | 地域包括ケアシステム | 1.地域包括システムの意義と概念 | |
| | 22 | 地域・在宅看護での 災害対策 テスト | 1.災害に対する準備と対応 ・ステーションにおける療養者への備え | |
| | 教科書 参考書 | 系統看護学講座 専門分野 在宅看護論 医学書院 国民衛生の動向 一般社団法人 厚生労働統計協会 | | |
| | 評価方法 | 筆記試験にて評価を行う。 | | |

| 分野 | 科目名 | 単位(時間) | 講師名 |
|------|---|----------------------------|---|
| 専門分野 | 地域・在宅看護援助論 I | 2(45) | 専任教員 外部講師 |
| | 開講時期 | 講義回数 | |
| | 2学年前後期 | 22回 | |
| 実務経験 | | ■ 有 □ 無 | |
| 目標 | 1.療養者と、その家族の在宅での看護技術・物品の工夫を考えることができる。 2.地域で生活する人々の健康と暮らしを支える看護について理解する。 3.生活の場で行われる治療と看護について理解する。 | | |
| 授業内容 | 回 | 項目 | 内容 |
| | 1 | 地域・在宅看護でのマナー | 1.実習生としての身だしなみ 2.実習生としての態度と行動 |
| | 2 | 在宅療養者の日常生活援助技術 | 1.療養者や家族を支援するためのコミュニケーション |
| | 3 | | 2.観察とフィジカルアセスメントの必要性 |
| | 4 | | 3.食生活に関する在宅看護技術 |
| | 5 | | 4.排泄に関する在宅看護技術 |
| | 6 | | 5.移動・移乗に関する在宅看護技術 |
| | 7 | | 6.清潔に関する在宅看護技術 |
| | 8 | | ※事例を用い、シミュレーションで各グループ、看護技術・工夫等について発表する。 |
| | 9 | 医療管理を要する療養者の看護 | 1.褥瘡の予防と処置 |
| 10 | 2.尿道留置カテーテルの適応条件と管理方法 | | |
| 11 | 3.ストーマ・ウロストミーの管理方法 | | |
| 12 | 4.経管栄養法の管理方法 | | |
| 13 | ・経鼻経管栄養法・胃瘻(PEG・PTEG・PEG-J) | | |
| 14 | 5. 中心静脈栄養法の管理方法 | | |
| 15 | ・皮下埋込み式ポート・カテーテル管理・輸液ポンプ | | |
| 16 | 退院調整・退院支援医療連携 | 6. 在宅酸素療法の管理方法 | |
| 17 | | 7. 在宅人工呼吸療法(NPPV・HMV)の管理方法 | |
| 18 | | ・排痰法(吸引法・体位ドレナージ・スクイーピング法) | |
| 19 | | 8.緩和ケア | |
| 20 | | ・鎮痛薬(麻薬)の取り扱い方・ | |
| 21 | | 1.療養の場の移行期における支援の必要性 | |
| 22 | ・自己意思決定支援(ACPも含む) | | |
| | テスト | 2.退院支援のプロセス(第1段階～第3段階) | |
| | | ・退院支援における他職種カンファレンス | |
| | | 3.ケアマネージメントの必要性 | |
| | | ・施設入所時の連携・居宅のケアマネージメント | |
| | | 4.インフォーマルネットワーク | |
| 教科書 | 系統看護学講座 在宅看護論 | 医学書院 | |
| 参考書 | 写真でわかる訪問看護アドバンス | 訪問看護の世界を写真と動画で学ぶ | インターメディカ |
| 評価方法 | 各筆記試験(90点)・レポート(10点)にて評価を行う。 | | |

| 分野 | 科目名 | 単位(時間) | 講師名 |
|------------|---|--|---|
| 専門分野 | 地域・在宅看護援助論Ⅱ | 2(45) | 外部講師 専任教員 |
| | 開講時期 | 講義回数 | |
| | 2学年後期 | 22回 | |
| 実務経験 | | <input checked="" type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無 | |
| 目標 | 1.介入時期と看護の継続性について考えることができる。 2.地域で生活している人へ健康と保持増進、疾病の予防、健康回復について考えることができる。 3.事例事例を通して在宅で生活している療養者の看護上の問題について考えることができる。 | | |
| 授業内容 | 回 | 項目 | 内 容 |
| | 1 | 各症状・状態に 応じた対象者への 在宅看護 | 1.小児期の在宅看護の実際 ・先天性疾患の患児・精神運動発達遅滞児 |
| | 2 | | 2.精神障害者の在宅看護の実際 |
| | 3 | | 3.神経難病で療養している人への在宅看護の実際 |
| | 4 | | 4.脊髄損傷で療養している人への在宅看護の実際 |
| | 5 | | 5.障害者で療養している人への在宅看護の実際 |
| | 6 | | 6.認知症で療養している人への在宅看護の実際 |
| | 7 | | 7.終末期で療養している人への在宅看護の実際 |
| | 8 | 生活習慣病予防 保健事業 | 1.生涯各期における健康の保持増進や疾病予防における 看護の役割について |
| | 9 | | 2.環境が健康に及ぼす影響と予防策について |
| 10 | 3.対象者及び家族に必要な資源を理解し、健康の保持増進 に向けた生活に関する支援について | | |
| 11 | | | |
| 12 | | | |
| 13 | 地域・在宅看護での 看護の展開 | 1.在宅酸素療法を受けている療養者への在宅看護 | |
| 14 | | 1)情報の収集 | |
| 15 | | ・医師の訪問看護指示書 | |
| 16 | | ・居宅サービス計画①②③ | |
| 17 | | ・週間サービス計画書 | |
| 18 | | ・サービス利用・提供票 | |
| 19 | | 2)アセスメント | |
| 20 | | 3)看護上の問題点 | |
| 21 | | 4)訪問看護計画 | |
| 22 | | | |
| | テスト | | |
| 教科書 参考書 | 系統看護学講座 在宅看護論 医学書院 | | |
| 評価方法 | 筆記試験(80点)・レポート(20点)にて評価を行う。 | | |